

高尾山山頂から発信！

のぶすま

「のぶすま」とはムササビの古い呼び名です。

vol. 48 季刊
2017年夏号

高尾山のブナと昆虫

高尾山には、約5000種ほどの多様な昆虫がいると言われています。これほど多くの昆虫が生息している理由の一つに、低山でありながら、より標高の高い場所を好む山地性の昆虫が見られることがあげられます。その要因として一役買っているのがブナです。今回は、そんなブナと昆虫の関係を紹介します。



ヨコヤマヒゲナガカミキリ
幹に止まっていたり、^{あか}灯りに飛来^{ひらい}するところが見られる。
成虫出現時期：7-9月。

フジミドリシジミ
美しい緑色の光沢がある翅は、まるで宝石のよう。
成虫出現時期：5-7月。

ピロードアシナガオトシブミ
体長5mm程の小さなオトシブミ。金色の毛で覆われた身体は、キウイフルーツのよう。
成虫出現時期：4月。

アオタマムシ
タマムシの中でも、美しさはトップクラス！日中の暑い時間によく飛翔する。
成虫出現時期：7-8月。

ルリボシカミキリ
青空のような水色の翅をもつ綺麗なカミキリムシ。日中に木の幹などで見られる。
成虫出現時期：6-8月。

本来、ブナはもっと標高の高い場所で見られる植物ですが(標高900~1000m以上)、高尾山では標高400mあたりから、ブナが見られるようになります。なぜ高尾山にブナがあるのでしょうか？

高尾山の歴史がもっと好きになる？

「高尾山のれきし」参考文献

～樹木が伝える高尾山の歴史～

歴史がいっぱいの高尾山、今回の歴史コーナーを書くにあたって参考にさせて頂いた文献をご紹介します。

文献の伝える高尾山と現在の高尾山を歩いて見比べてみると面白いかも知れませんね。

■武蔵名勝図会 巻8. 植田孟縉. 1820.

八王子千人同心の植田孟縉により、現在の多摩付近にあたる地誌が全12巻にわたり収録されています。

著者自身の描いた名所や名物の詳細な挿絵も豊富で、当時の高尾山の風景も収められています。

1967年および1993年には片山迪夫の校訂による活字本(慶友社)が出版されました。

■八王子名勝志 巻3 巻4. 百枝翁. 1860以降.

甲州道中の日本橋から大月までの宿場や名所の紹介がされています。

こちらも詳細な挿絵が豊富で、高尾山では清滝・古滝・琵琶滝・金毘羅台・薬王院全景などが描かれています。

国立国会図書館デジタルコレクションからインターネット上で閲覧することができます。

■高尾山誌. 逸見敏刀. 1927.

昭和2年、ケーブルカーの営業が開始された年に出版されました。

高尾山についての地誌・動植物・登山コースのことなどが、ガイドブック的にまとめられています。

当時の人々が向けていた、高尾山への興味の対象をうかがい知ることができます。

ヨコヤマさん(ヨコヤマヒゲナガカミキリ)は、ブナを食べます。だから、高尾山で会えるんですね。
※詳しくは一面「高尾山のブナと昆虫」をご覧ください。

木に頼る植物

高尾山を歩くと、太い木々にくっついている植物が多く見られます。

例えば太陽の光を得るために高い場所を目指し木に絡む「つる植物」や、土に根を張らずに木に掴まっているだけの「着生植物」という種類もあります。高尾山ではセッコクという植物が有名で高い木に着生し光合成をしています。この他にも樹木に寄生しているヤドリギという面白い植物があります。枝の中に根っこを生やして栄養を吸い取りますが、葉を出して自分でも光合成する植物です。これを「半寄生植物」というそうです。

木にくっついている植物たちは、独自の方法で木に頼っているんですね。

樹齢10年ほどの若い木々が生えている森には、木に頼る植物はあまり見かけません。ですが、高尾山は大昔から守られている貴重な太い木々が多く、そんな森にはつる植物や着生植物が多く見られます。すぐには枯れない木々ばかりで、植物たちは頼りやすい環境なんだなあと感じます。

ちなみに、私は一人暮らしをしていますが、実家の夕食に頼る場合があります。この場合、私はある意味両親に寄生している事になりますが、実家に暮らしていないので、完璧な寄生とは言えません。半寄生状態です。

私も両親という貫禄ある太い木々に半寄生しながらも、長生きしてもらえるように優しく寄生しよう、植物から学ぶ今日この頃なのです。

解説員 くらむ vol.10



たかおさん

「憧れのヨコヤマさん」の巻



「のぶすま」最新号とバックナンバーを高尾山山頂にある、高尾ビジターセンターにて準備しております。

〈解説員 加藤〉

高尾山のブナ

ブナは、気候的に涼しい場所で生育する植物です。高尾山のブナは、江戸時代中期の寒冷期に定着したものと考えられています。高尾山は、薬王院有喜寺があったことにより神聖な山として自然が護られてきました。そのため、天然林が残されており、今なお昔からの植生が保たれています。

ブナと共に生きる昆虫

ブナを利用する昆虫は、種類により幼虫や成虫の限られた時期しか利用しないものから、一生を通して利用するものまで様々です。高尾山にブナがなければ、これらの昆虫は生息することができないのです。

成虫がブナを食べる

アオタマムシ
成虫がブナ・イヌブナの葉を食べます。幼虫は、枯れたモミを食べます。

「ブナとモミの両方がないと生きていけない！」

ピロードアシナガ
オトシブミ
葉を食べる

ヨコヤマヒゲナガカミキリ
樹を食べる

幼虫がブナを食べる

タカオメダカカミキリ
幼虫の時はブナの枯れ枝を食べて育ちます。

実物大
高尾山で見つかり新種として発表されたカミキリムシ!

フリボシカミキリ
樹を食べる

フジミドリシジミ
葉を食べる

高尾山のブナウォッチングポイント

高尾山でブナ・イヌブナが見やすいのは、1号路では山頂付近、霞台、ケーブルカー高尾山駅、それと4号路です。

ブナ

- ・スベスベ
- ・白っぽい

裏側にやや毛がある

側脈は7~11

樹皮

イヌブナ

- ・ザラザラ
- ・ブナより黒っぽい
- ・ひこばえが生える

裏側に毛がある

側脈は9~14

ひこばえ

樹皮

最後に

高尾山の森林は、開山以降に薬王院有喜寺の寺領として、また現在では明治の森高尾国定公園として護られてきました。そのため、今なお多様な生物が生息できる環境になっています。高尾山を登っていると、ブナとともに暮らす昆虫をはじめとした、山地性の昆虫をよく目にします。低山でありながら、山地性の昆虫も生息する高尾山は、昆虫観察にはもってこいの場所です。ぜひ、高尾山の昆虫に会いにきてみませんか？

※高尾山ルールでは、動植物の採集をしないことをお願いしています。 〈解説員 福澤〉

高尾山のれきし vol.10

樹木が伝える高尾山の歴史

大きな樹、変わった形の樹、美しい樹……。樹木は人々の気を惹きつけるエネルギーを持っています。その生命力は伝説を生み、高尾山に語り継がれてきたのです。



高尾山で一番有名な樹木といえば何といっても「タコ杉」なのではないでしょうか。高さ37m、幹囲約6m、樹齢はおよそ450年とされています。見上げても樹頭が分らないほど高くそびえる雄大な姿と、タコの足のよう曲がりくねった根が私達の目を惹きつけます。

「タコ杉」の周辺では、タコの石像「ひつぱりだこ」と一緒に記念撮影をする方が賑わっています。

現代の私達の心に沸き起こる樹木への強い感性、書物を読んでみると昔の人々も同じに感じていたことがうかがえます。

江戸時代後期および幕末頃の書物『武蔵名勝図会』や『八王子名勝志』では、タコ杉は『一本杉』の名で紹介されています。

道脇の5~7mほど小高い丘に、雑木に混じり一本だけ杉の古木が生えていたため名付けられたと書かれています。

さらに昭和初期の書物『高尾山誌』では、今も伝わる蛸杉伝説が紹介されていて、道を造るため杉を伐ろうとしていたところ、

一夜にして根が曲がり、タコの足のようになつたと書かれています。

また、タコ杉の付近には、眼病に効くという清水のたまる樹木があったといずれの書物にも書かれています。その樹木の種類はブナあるいはメグスリノキと紹介されています。

樹根のくぼみにたまる清水を人々は「御手洗水(みたらしみず)」「御加持水(おかじみず)」「薬師(やくし)の御手洗(みたらしみず)」と呼び、こぞって洗眼をしたといわれています。

この樹木にまつわる名所は失われてしまつたとされていますが、周辺を探してみると、ブナやメグスリノキがあったり、あるいは意味ありげなコナラの大樹があったりと、実在したことを感じさせる状況が残っています。

人々の記憶と歴史の数々をつむいできた樹木たちは、まさに高尾山の生き証人。願わくはこれからも末永く私達を見守ってもらいたいものです。

〈解説員 藤野〉

見られる時期…5月~8月ごろ
見られる場所…1号路、山頂付近(木の葉の上や、水たまりで吸水している姿がよく見られます)

〈解説員 小林〉

名前は、翅の模様が、水面に落とした墨と油が織り成す模様を紙面に写し取る伝統芸術「墨流し」に由来します。その美しさはきつとみなさまからお「墨」付きを頂けるのではないのでしょうか。

口吻(こうふん)が紅いのが特徴

模様と名前がオシャレな蝶!

明るい所で見ると、青緑色を帯びた独特な色合いが引き立つ

いちおし vol.6

解説員の